

看護基礎教育修了時のキャリアビジョンに影響する統合実習の学び

小野麻由子

Learning through integrated practical training that affects the career vision at the time of completion of basic nursing education

Mayuko ONO

要旨：統合実習による学びが看護基礎教育修了時のキャリアビジョンにどのような影響があるのかを明らかにした。

2012年2月～3月、統合実習を終了した学生17名に対し半構造化面接を行った。

「統合実習の学び」「キャリアビジョンを考えたこと」に関する内容を質的に分析し、類似性のあるものについて検討・分析しコード化し、類似した内容をサブカテゴリー化し、カテゴリー化した。

175のコードから25のサブカテゴリー、【視野の広がりによる新たな学び】【段階を踏んだ学びの深化】【理想とする看護師像の明確化】【看護師との距離感の短縮】【就職後のイメージ化による安心感】【モチベーションの向上】【実習から現場へのステップ】【職業人としての心構え】の8のカテゴリーを抽出した。

統合実習は、学びを深化させ、看護基礎教育修了時のキャリアビジョンとして理想の看護師像が明確となり、アイデンティティの形成に影響があることが明らかとなった。

キーワード：統合実習、看護基礎教育修了時、キャリアビジョン

Abstract : To clarify the effects of learning through integrated practical training on career vision at the time of completion of basic nursing education.

Semi-structured interviews were conducted with 17 students who had completed their integrated practical training in February-March 2012. The contents related to “learning through integrated practical training” and “having thoughts about career vision” is qualitatively analyzed to the study and analyzed to encode for some of the similarities, similar contents to sub-categorization, and/or categorization. A total of 25 sub categories and the following eight categories were identified from a total of 175 codes: 1.“new learning from expansion of perspective” 2.“gradual deepening of learning” 3.“clarification of an ideal image of nurses” 4.“reduction in sense of distance toward nurses” 5.“sense of comfort resulting from the formation of images of professional life” 6.“increased motivation” 7.“the step from practical training to actual settings” 8.“the mindset as a professional”.

These results became clear that integrated practical training has the effect of to deepening learning and clarifying the ideal image of nurses as a career upon completion of basic nursing education, and forming identities.

Key words : integrated practical training, upon completion of basic nursing education, career vision

日本赤十字秋田看護大学看護学部

第16回日本看護管理学会年次大会で本研究の一部を発表した。

I. 緒言

厚生労働省「看護教育の内容と方法に関する検討会」¹⁾により、看護師教育の内容と方法についての検討がされ、看護師に求められる5つの実践能力が報告されている。これらの能力を獲得するための教育内容として、「看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標」が新たに作成された。つまり、看護実践能力向上のための教育を意図的に行う必要があることが示唆されている。また、看護実践能力の向上、習得には看護基礎教育における臨地実習が重要であり、看護の方法について、「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために臨地実習は不可欠な過程である²⁾。しかし、看護基礎教育の現状として、臨地実習では、入院患者の在院日数の短縮化により学生が実習期間を通して一人の患者を受け持つことが難しい状況にある³⁾。つまり、現状の限られた臨地実習の経験では、新人看護師として入職後に求められる看護実践能力に対応しきれていないことも看護基礎教育と臨床現場で求められる能力の乖離の1つである。

公益社団法人日本看護協会⁴⁾による新人看護職の離職率に関する報告では、2011年度は7.5%であり、前年比0.6ポイント減少し、2008年から連続で減少している。これは2010年4月から新人看護職員研修が離職率低下への施策の一つとして努力義務化され、各病院が取り組みを進めてきたことの効果が示唆されている。

2009年の指定規則改正以降で「統合実習」に関連する文献を医学中央雑誌で検索したところ、雑誌をあわせて118件があった。これらは指定規則改正に伴い新たな実習指導案を作成のもと「チーム医療」「複数受け持ち患者実習」「夜間実習」「管理実習」を主とした実施方向であった。いずれも、臨床現場に備え、基礎教育の段階において看護実践能力の向上をめざしていた。また、統合実習実施の時期に関して、文部科学省⁵⁾は看護学の学習の統合は、最終年次だけでなく、学年の進行と共に段階的に追究するものとしている。したがって、「看護の統合と実践」として教授する内容を適切に配置し、到達目標に向かって段階的に修得できるよう工夫し、卒業時の看護実践能力を担保する必要があるとしている。現状としては、73の検索結果のおおよその教育機関が最終学年に実施していた。

一方、筆者⁶⁾が行った看護基礎教育修了時から

キャリア初期までのキャリアビジョンの変化に対する研究結果では、基礎教育修了時にはすでに、漠然とではあるがキャリアビジョンを持っており、そのビジョンに大きく影響をあたえていたのが臨地実習であった。つまり、臨地実習の最終の学年で実施される場合が多い統合実習は、これまでの看護基礎教育の積み重ねによる学びの最終の段階であり、統合実習の経験はキャリアビジョンに大きな影響をもたらすことが推測される。

II. 研究目的

統合実習による学びが看護基礎教育修了時のキャリアビジョンにどのような影響があるのかを明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 用語の定義

キャリア：「人の一生を通じた仕事であり、人間の生き方、その表現。また、生涯を通じた仕事と家庭の調和 (Schein, E, H, 1978/1991)」というScheinの定義を用いる。

キャリアビジョン：自分が描いているキャリア像。

統合実習：2009年看護基礎教育カリキュラム改正における統合分野の看護の実践と統合の総称名。

3. 研究期間

2011年9月～2012年6月

4. 研究対象

1) 対象施設の選定

「看護展望：統合実習の指導案と展開」⁷⁾特集で「複数受け持ち実習」「チーム実習」「管理実習」「夜間実習」を中心に共通した統合実習を展開し、指導案を公開している学校とした。

2) 対象者の選定

研究対象者は、統合実習を終えた看護専門学校3年生で、以下の手順により協力が得られた17名である。

(1) 2012年看護系雑誌「看護展望」37巻2号⁸⁾に指導案が掲載されており、同一の統合実習内容を充たしていた3校の統合実習担当者あてに研究協力を依頼し、承諾のあった3校の

学生を対象とした。

- (2) 倫理審査委員会のある2校に関しては何れも当該校における倫理審査を受けた。
- (3) 対象校の統合実習を終了した全学生（180名）に協力依頼文と研究協力に関する意向伺いを配布してもらった。
- (4) 対象者は、調査協力が可能な場合、対象者自身に返信用封筒にて研究者に返送してもらい、研究者から連絡をし、インタビューに関する日程調整を行った。

5. データ収集方法

- 1) 収集期間：2012年2月～3月（統合実習終了後、約2～3か月）
- 2) 研究者の了解を得てICレコーダーを使った半構造化面接を行った。
- 3) プレテスト
インタビューガイドの妥当性をみる為に、プレテストを実施した。
協力が得られた2名の統合実習終了学生にインタビューガイドを用いてインタビューを実施し検討した。その結果、キャリアという言葉からは仕事に対するイメージが強いため、インタビューの際には、キャリアという言葉の説明時、「仕事と生活設計をふまえて教えてください。」を追加し、キャリアビジョンについてもより具体的にイメージできるよう「キャリアビジョンを含め、これから看護師として働くうえで何か影響はありましたか。」という内容をそれぞれ追加した。
- 4) 本調査では、以下に述べるインタビューガイドに沿って実施した。
 - (1) 対象者の背景（年齢、性別、就職先を含む対象の背景）。
 - (2) 現段階であなたが描いている目標とする看護師像を話して下さい。
 - (3) 4月以降、看護師としてどんなビジョンを持ち、キャリアを歩んでいきたいと思えますか？仕事と生活を含んだキャリアを踏まえて教えてください。
 - (4) (3)に影響を与えた経験はどんなことですか？
 - (5) これまでの実習と統合実習との学びで大きく違うことは何ですか？
 - (6) 統合実習はあなたの現在のキャリアビジョンを含め、これから看護師として働くうえで

何か影響はありましたか？

6. データ分析方法

得られたインタビュー結果を文章に書き起こし、「統合実習の学び」「キャリアビジョンを考えたこと」に関する内容を含む文節を抽出し、コード化した。次に類似した内容をまとめ、サブカテゴリー化、更にカテゴリー化した。

分析過程で、解釈の偏りを最小限にするよう複数の研究者で検討した。

7. 倫理的配慮

秋田しらかみ看護学院研究倫理委員会の審査承認を得た。

調査協力の有無に関する情報は対象者以外には開示しないことを確約した。また、インタビューは研究協力者のプライバシーを守るため依頼施設の一室を貸していただいた。さらに、研究協力者の選択における任意性を確保し、個人情報に関しては、個人が特定されないようID番号を附して用い、記録データである録音媒体及び記述データは、研究終了後に破棄した。

以上のことを説明し、同意書を得たうえで面接を実施した。

IV. 結果

1. 面接時間

17名の対象者に面接を実施した。面接時間は合計378分59秒、一人当たりの面接時間の平均は22分27秒であった。

2. 対象の背景

- 1) 対象者の年齢：年齢21歳11名、22歳～30歳3名、31歳～40歳1名、41歳～45歳2名
- 2) 対象者の性別：男性4名、女性13名
- 3) 対象者の実習病院：総合病院2校、大学病院1校
- 4) 対象者の就職先施設の規模：対象者は、200床以下の一般病院就職予定者2名、総合病院就職予定者10名、大学病院就職予定者4名、進学予定者1名
- 5) 対象者のキャリアビジョンへの影響要因（インタビュー結果より）
 - (1) 自己の病気体験、身近な親族の病気、震災経験という生活体験からの影響
 - (2) 話しやすい雰囲気にしてくれる臨床指導

者、患者さんに喜んでもらえた成功体験という臨地実習からの影響
 (3) 講義内容、教授方法、臨地実習での教員の関わり、教員によるキャリア教育、教員に褒められた実習での成功体験、学び続ける教員の姿という看護教員からの影響
 6) 対象者が描く今後のキャリアコース（インタ

ビュー結果より）
 認定看護師、専門看護師、臨床指導者、災害看護、師長、大学院進学

3. データの概要

175のコードから25のサブカテゴリー、8のカテゴリーを抽出した。

表1 看護基礎教育修了時のキャリアビジョンに影響する統合実習の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード例
視野の広がりによる新たな学び	時間管理から見えたこと	時間配分をしっかりと考えていた。 実際の時間管理が見えた。 時間の使い方をあれほど考えたことはなかった。 優先順位考えると、自分のやりたいことが全部できるわけではないと気付かされた。 患者さんの希望も考えて優先順位立てるのは大変だったけど、働いたらやることなので学びになった。
	夜間実習から得た新たな学び	夜間の患者体験をして患者さんの気持ちに近づけた。 看護師は時間によって患者さんの心が変わるという事も知ってて、それに合わせて看護していることを知り、新たな学びというか衝撃的であった。 少ない看護師の人数でチームワークをいかしてどう動くのかが見えた。
	師長の役割の重要性	統合では師長さんが良く見えた。 個々のスタッフ、個々の患者さんをよく知っていて、なおかつ学生のことも見えてくれて、師長さんはすごい人だった。だから統合に行って師長になりたいと思った。 管理だけではなく、患者さんや家族へもサポートもしていて、師長さんだからできることだと思った。 師長さんがいいと病棟全体の雰囲気がよい。
	看護はチームであり組織である	チームで成り立っていることを知り、リーダー、メンバーが見えた。 チームで看護していることを余裕を持って見れたのが統合実習。 看護部の組織が学べた。看護の問題を組織で解決していることを学んだ。 個人がいて一人一人が目標をしっかりと持てば、病院の大きい目標が達成できるっていうのがわかった。
	つながりや連携	申し送りなどからも勤務のつながりが見えた。 統合実習先の病棟は看護師同士が声をかけあい、協力している良いチームだと思い就職先に決定した。
	視野の広がり	これまでは自分のことで精一杯だったが、統合では看護師さんを見れる余裕が出てきていた。 自分もチームの一員として看護師と動いてるから、立ち位置が今までとは違う領域とは違う心の余裕があった。視野が広がった。 看護師がどのように動いて患者さんと関わって効率のよさを考えながら動くことが多かった。
段階を踏んだ学びの深化	課題を持って臨んだ	最後の統合はこれまでの自分の課題を持って臨んだ。 自分の意見をしっかりと看護師さんに述べようと思って臨んだ実習だったので見えたと思う。
	考えを行動に移した	看護が見えてきていて、自分で考えたり相手に伝えたり、自分の考えたケアを患者さんに行動としてできたのが統合実習。 考えたことをやっとな行動に移せるようになった。
	記録のためだけではなく患者さんと関わって楽しい	これまでの実習とは違った楽しさがあった。統合は毎日が楽しかった。 領域では記録のために意図的に会話している部分が多かったけど、統合は患者さんを知りたいとか看護をするためにコミュニケーションするから楽しいんだと思う。
	これまで求められていたことの意味づけ	統合実習では今までやってきたことの意味づけができた。 今まで実習で求められてきた根拠や個性がきれいにまるくおさまったって感じ。

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード例
理想とする看護師像の明確化	理想の看護師像	自分がどんな看護師になりたいかを統合実習で考え始めることができた。その看護師の関わりを見て心が動いた。理想とする看護師に出会えた。統合実習は理想の看護師を見つけられキャリアビジョンに大きな影響を与えた。理想とする看護師にあったのが統合実習だったのでまさに決定打であった。
	将来像を見分ける力	こんな看護師になりたいと強く思った反面、この人のようにはならないと思った。看護師の視点から良い看護師、悪い看護師を見分けられるようになった。将来像を見分ける力がついた。
	方向性の決定	どういう看護師になりたいかは最近定まってきた。統合実習で理想と思っていた看護師が実際に存在するということを知り、目指すところが固まった。
看護師との距離感の短縮	看護師に受け入れられてる実感	優しく教えてくれて、受け入れてくれている感じが伝わって嬉しかった。
	看護師との距離感が縮まった	統合実習は看護師との距離が近かった。これまでのイメージとは違い近い存在だった。看護師と話す機会も多く、距離が近くなった。
就職後のイメージ化による安心感	新人教育体制を知ったことでの安心感	プリセプター制を知って新人は守られていると思った。看護部長や師長がどう考えて新人を育てようとしているかを知って不安が軽減した。自分を支えてくれているのがわかって安心した。
	看護師として働くことにイメージが持てた安心感	看護師とのコミュニケーションがとれ、病棟の実際が見れた。一日の流れが見えた。こうやって仕事していくのだというイメージができた。仕事のイメージができると安心した。働く自分をイメージでき、怒られることにも意味が分かるようになった。働く前には大事な実習だった。
モチベーションの向上	就職後の責任感	責任感が大事。責任持ってやれたら楽しいと思う。
	モチベーションの向上	4月からの自分がイメージできてモチベーションが上がった。
実習から現場へのステップ	困惑を避ける効果	この実習やらないで就職したら困惑することが多かったと思う。
	職業の予行練習	これから始まる職業の予行練習みたいな感じでした。リアリティショックを一段階和らげたと思う。
	実習と現場をつなぐ	臨床に近いような関係で、しかも今までの基礎も発揮できるような環境だったのが統合実習だった。実習と現場のギャップがある中で統合という階段をつくったというのは有効だったと思う。
職業人としての心構え	実際の仕事の忙しさを知った	多くの患者さんを把握しなければならず忙しかった。びっくりするほど忙しかった。
	今後の自己の課題が見えた	患者の不安をしっかりと解決して退院させてあげたい。予定通りにいかに焦ってしまう傾向が課題。今後、忙しくてもしっかりと患者観と向き合うことが課題。
	就職前に職業人としての心構えができた	統合で自分の課題が見え、働く前の心構えができた。就職する前に職業人としての心構えみたいなものができた。

以下、【 】はカテゴリー、〈 〉はサブカテゴリー、「 」はコードとして説明する。

1) 【視野の広がりによる新たな学び】

統合実習では、時間管理や夜間実習などからも新たな学びが得られており、病棟における師長の役割の重要性や看護は組織によって成り立っていることの新たな学びから、視野が広がっていた。具体的には、「実際の時間管理が見えた。」「時間の使い方をあれほど考えたことはなかった。」「患者さんの希望も考えて優先順位立てるのは大変だったけど、働いたらやることなので学びになった。」という〈時間管理から見えたこと〉や「看護師は時間によって患者さんの心が変わるという事も知っていて、それに合わせて看護していることを知り、新たな学びというか衝撃的であった。」という〈夜間実習から得た新たな学び〉が抽出された。また、「統合では師長さんが良く見えた。」「個々のスタッフや患者さんをよく知っていて、なおかつ学生のことも見てくれて、師長さんはすごい人だった。だから統合に行って師長さんになりたいと思った。」「師長さんがいいと病棟全体の雰囲気が良い。師長さんのすごさに圧倒され、大きく見えた。」という〈師長の管理の重要性〉や「チームで成り立っていることを知り、リーダー、メンバーが見えた。」「個人がいて一人一人が目標をしっかり持てば、病院の大きい目標が達成できるっていうのがわかった。そういう意味で組織を意識するようになった。」という〈看護はチームであり組織である〉が抽出された。さらに、「申し送りなどからも勤務のつながりが見えた。」「統合実習先の病棟は看護師同士が声をかけあい、協力している良いチームだと思いき就職先に決定した。」という〈つながりや連携〉や「これまでは自分のことで精一杯だったが、統合では看護師さんをみれる余裕が出てきていた。」「自分もチームの一員として看護師と動いているから、立ち位置が今までとは違い領域とは違う心の余裕があった。視野が広がった。」という〈視野の広がり〉が抽出された。

以上のサブカテゴリーによって構成されていた。

2) 【段階を踏んだ学びの深化】

これまでの学びの積み重ねがあつて、統合実習では課題を持ち、行動に移すことができた段階である。具体的には「最後の統合はこれまで

の自分の課題を持って臨んだ。」という〈課題を持って臨んだ〉や「看護が見えてきていて、自分で考えたり相手に伝えたり、自分の考えたケアを患者さんに行動としてできたのが統合実習。」という〈考えを行動に移した〉が抽出された。さらに、「領域では記録のために意図的に会話している部分が多かったけど、統合は患者さんを知りたいとか看護をするためにコミュニケーションするから楽しいんだと思う。」という〈記録のためだけではなく患者さんと関わって楽しい〉や、「統合実習では今までやってきたことの意味づけができた。今まで実習で求められてきた根拠や個性がきれいにまるくおさまったって感じ。」という〈これまで求められていたことの意味づけ〉が抽出された。

以上のサブカテゴリーで構成されていた。

3) 【理想とする看護師像の明確化】

理想とする看護師像が明らかになったことである。具体的には「自分がどんな看護師になりたいかを統合実習で考え始めることができた。」「統合実習は理想の看護師を見つけられキャリアビジョンに大きな影響を与えた。」という〈理想の看護師像〉や、「看護師の視点から良い看護師、悪い看護師を見分けられるようになった。」「将来像を見分ける力がついた。」という〈将来像を見分ける力〉、「統合実習で理想と思っていた看護師が実際に存在するということを知り、目指すところが固まった。」という〈方向性の決定〉が抽出された。

以上のサブカテゴリーで構成されていた。

4) 【看護師との距離感の短縮】

これまでの臨地実習とは違い、看護師と共に行動する場面が多く、受け入れられている実感と共に距離感が縮まっていたことである。具体的には「優しく教えてくれて、受け入れてくれている感じが伝わって嬉しかった。」という〈看護師に受け入れられている実感〉や、「統合実習は看護師との距離が近かった。」「これまでのイメージとは違い近い存在だった。」という〈看護師との距離感が縮まった〉が抽出された。

以上のサブカテゴリーで構成されていた。

5) 【就職後のイメージ化による安心感】

看護を仕事としていくことのイメージが持て、新人看護師の育成体制を知ったことにより安心感がもてたことである。具体的には、「プリセプター制を知って新人は守られていると

思った。」「看護部長や師長がどう考えて新人を育てようとしているかを知って不安が軽減した。」といった〈新人教育体制を知ったことでの安心感〉や、「仕事のイメージができるとう安心した。」「働く前には大事な実習だった。」という〈看護師として働くことにイメージが持てた安心感〉が抽出された。

以上のサブカテゴリーで構成されていた。

6) 【モチベーションの向上】

就職後の自分がイメージでき、楽しさを予測しながら看護師として働くことへのモチベーションが向上していることである。具体的には「責任持ってやれたら楽しいと思う。」という〈就職後の責任感〉や、「4月からの自分がイメージできてモチベーションが上がった。」という〈モチベーションの向上〉が抽出された。

以上のサブカテゴリーで構成されていた。

7) 【実習から現場へのステップ】

統合実習は職業への準備段階であり、教育と臨床をつないでいるということである。具体的には、「この実習やらないで就職したら困惑することが多かったと思う。」という〈困惑を避ける効果〉や、「これから始まる職業の予行練習みたいな感じでした。リアリティショックを一段階和らげたとと思う。」という〈職業の予行練習〉、「実習と現場のギャップがある中で統合という階段をつくったというのは有効だったと思う。」という〈実習と現場をつなぐ〉が抽出された。

以上のサブカテゴリーで構成されていた。

8) 【職業人としての心構え】

就職前に臨床の実情を知り、自己の課題が見えたと共に職業人としての心構えができたことである。具体的には「多くの患者さんを把握しなければならず忙しかった。」「びっくりするほど忙しかった。」という〈実際の仕事の忙しさを知った〉や、「今後、忙しくてもしっかりと患者観と向き合うことが課題。」「予定通りにいかなく焦ってしまう傾向が課題。」といった〈今後の自己の課題が見えた〉、「就職する前に職業人としての心構えみたいなものができた。」という〈就職前に職業人としての心構えができた〉が抽出された。

以上のサブカテゴリーで構成されていた。

V. 考 察

1. 統合実習における学びの深化

【視野の広がりによる新たな学び】【段階を踏んだ学びの深化】のカテゴリー抽出からも、統合実習という臨床実践に近い形での新たな学習の形態は、これまでの看護基礎教育の学びの段階からさらに、視野が広がり新たな学びへと深化していた。

視点が患者ケアから看護師へ、そして看護はチームで成り立つことや組織的な視点へと広がり、これまでの領域実習における受け持ち患者の個別性を深める学びから看護師としての視点を基盤に組織的な視点へと視野が広がっていることが明らかとなった。さらに、学生個々が、看護師と同様にチームに存在することによって1日の流れの中で、優先順位や時間管理を考えており、看護をマネジメントの視点でとらえていると考える。また、これまでの臨地実習では自らが考えたことを相手に伝え行動に移すことができなかったことや、求められ続けてきたケアの根拠の意味などといった自己解決が十分できていなかったことに対して課題を持って臨んでおり、これらの解決ができたということは看護基礎教育の最終段階でキャリアビジョンが具体化する過程において効果的であったのだと考える。これらのことから、統合実習の実施の時期に関しては、学習の段階的な学びの積み重ねを基に、看護基礎教育の最終段階に設定することが望ましいと推察する。

P.ベナー⁹⁾は、臨床実践で、学生が自分の行動に対して理由づけを行うことをきちんと理解し、実践的な知識に置き換えることの重要性を述べている。統合実習では、看護における対象理解のためのコミュニケーション技術の必要性やこれまでの臨地実習で求められていた根拠や個別性の意味づけができたことから、実践の場においてこれまで机上で学んだ知識と技術が統合され、ようやく行動化できるようになり、実践の場において学びの深化へとつながっていると考える。

2. 【明確となった理想の看護師像】

【理想とする看護師像の明確化】のカテゴリー抽出からも、統合実習の段階では理想像を考え始め、将来像や方向性を決めていた。

林ら¹⁰⁾は、職業人としてのモデルが存在することは、職業人としての目標となり職業継続の励みになると述べている。このことから、理想

の看護師像を見つげられた者は、そのことがキャリアビジョンに大きな影響を与え、将来像や今後の方向性を決めていることが明らかとなった。また、太田ら¹¹⁾は、ロールモデルの存在は、見て取れる技術の断片を集めたものではなく、状況を体験するという経験の積み重ねであると述べている。つまり、統合実習は、これまでの領域実習で臨床指導者などから学んだ体験を経験として積み重ねた段階であり、より看護師に近い状況で関われる実習形態であることから、理想の看護師像が明確化していく時期と考える。

3. 【職業アイデンティティの形成】

【看護師との距離感の短縮】【イメージ化による安心感】【モチベーションの向上】【教育と臨床のギャップを埋める】【職業人としての心構え】の 카테고리抽出から、学生らはこの統合実習を実習から現場へのステップと感じており、就職前に職業人としての心構えができるなどの職業アイデンティティが形成されていた。

統合実習の実習形態上、これまで以上に看護師との距離が近い状況での実習であり、そのことから、学生は実習先の看護師らから看護学生としての存在を受け入れられていると実感している。また、看護基礎教育の段階から教育内容は臨床現場をイメージしやすい形に整えることにより、看護職として働くことのイメージ化へとつながり、安心感と共にモチベーションの向上につながっていることが考えられる。

勝原ら¹²⁾は、教育と臨床のギャップをなくすには、基礎教育においてより実践現場に近い実習を展開することが必要であると述べている。学生らも統合実習という段階は実習と現場をつなぐステップであると捉えており、教育と臨床現場をつなぐ上で効果的であることが明らかとなった。また、現場の実情を把握した上で、自己の課題を知り、看護基礎教育において看護職業人としての準備状況の機会となる実習形態は重要であると考えられる。

P.ベナーら¹³⁾は、看護師になるということ、 “形成” という言葉で最も明確に説明している。形成とは、単なる学習という方法で社会化されていくというより、意義、内容、意図、そして看護実践によって組成されるものである。このことから、統合実習では、これまでの実習で求められてきた根拠や個別性の重要性、さらには意味づけ

ができたという看護実践の経験によって看護師になるという形成を促進することができたのではないかと考える。また、山内ら¹⁴⁾は学生は実習での体験を通して職業について葛藤し、自分の仕事という感覚を得ており、実習は就労経験以上に職業的アイデンティティ形成の好機となると述べている。このように臨地実習で学びを積み重ね、実践現場に近い形での実習経験が、今後、看護師として働く上での課題が見え、職業人としての心構えができるといった職業アイデンティティが形成されていくと考える。

4. 研究の限界

本研究は統合実習からの学びによる看護基礎教育修了時のキャリアビジョンという視点で捉えたものでありその一部である。また、対象者選定は方法論的に限定された対象者のデータによるものであるため、年齢や性差、就職先による特徴までの分析には至らなかった。今後は、本研究結果が臨床と実践との架け橋になれるよう、実習内容の再構築及び調査研究を実施していきたいと考える。

VI. 結 論

統合実習は、学びを深化させ、看護基礎教育修了時のキャリアビジョンとして理想の看護師像が明確となり、アイデンティティの形成に影響があることが明らかとなった。

VII. 謝 辞

本研究の実施にあたり、ご理解くださいました学校長様、統合実習担当者様に厚く御礼申し上げます。また、ご多忙中の中、時間を割いてインタビューに応じ貴重な経験についてお話し下さいました学生の皆さんに深く感謝申し上げます。

尚、本研究の一部は第16回日本看護管理学会年次大会で発表している。

引用文献

- 1 「看護師基礎教育の充実に関する検討会報告書」：厚生労働省
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310qatt/2r9852000001314m.pdf> (参照2013.12.26).
- 2 「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」：文部科学省

- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm#3 (参照2013.12.26).
- 3 「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」：厚生労働省（平成23年）。
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316yatt/2r985200000131bh.pdf> (参照2014.1.3).
 - 4 公益社団法人日本看護協会. 2012年病院における看護職員需給状況調査速報. 2013.
 - 5 文部科学省. 指定規則改正への対応を通して追究する看護学教育の発展。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/031/toushin/07091402/005.htm
(参照2014.5.15).
 - 6 小野麻由子. 看護基礎教育修了時からキャリア初期における看護師のキャリアビジョンの変化とその要因分析. 第15回日本看護管理学会年次大会講演抄録集. 2011. P173.
 - 7 小倉啓宏. 教育と臨床をつなぐ統合実習. 看護展望. 2012. 37 (2).
 - 8 前掲7
 - 9 Patricia Benner、Molly Sutphen、Victoria Leonard、Lisa Day. (早野ZITO真佐子訳). ベナー ナースを育てる. 医学書院. 2011. P77.
 - 10 林有学, 米山京子. 看護師におけるキャリア形成およびそれに影響を及ぼす要因. 日本看護科学学会誌. 2008. 28 (1). P12-20.
 - 11 太田美緒, 前田樹海. 文献に見る我が国の看護教育におけるロールモデルの概念. 長野県看護大学紀要. 2009. vol.11. P51-61.
 - 12 勝原裕美子, ウィリアムソン彰子, 尾形真美哉. 新人看護師のリアリティ・ショックの実態と類型化の試み -看護学生から看護師への移行プロセスにおける二時点調査から-. 日本看護管理学会誌. 2005. Vol.32 No.1. P30-37.
 - 13 前掲9 P128.
 - 14 山内栄子, 松本葉子, 杉本吉美, 他. 看護大学における卒業前のキャリア・デザイン. 日本看護学教育学会誌. 2008. P43-52.

利益相反

本研究において利益相反に該当する事項はない。